

UZU ポスト No.9～教育相談編～

Unlimited Zest for Update



2016.9.21 山崎 美樹

平成 25 年度の調査によると、中学校における不登校生徒の数は 37 人に 1 人とされています。(小学校…276 人に 1 人/高等学校…929 人に 1 人)また、特に準不登校群の子どもたちにとっては、7 月と 10 月が要注意となります。

様々なきっかけで学校を休みがちになる生徒への対応は、その事例ごとによって変わってきます。ただ、あるポイントを知っていることで見通しがもてたり、冷静に対処できたりする場合もあるはずですよ。

今回は、鳴門教育大学教職大学院の「教育相談の理論と実践」(小坂浩嗣先生・末内佳代先生)から、不登校生徒やその保護者への対応のポイントを紹介します。

1. 家庭訪問の各段階

不登校生徒の家庭訪問には、次の 4 段階があります。生徒の状態によって、次の段階に進む時期やタイミングは異なりますが、これを意識することで、見通しをもって訪問を継続することができます。

レベル1: 学校無刺激

訪問に見通しをもつ

→何もしないことに全力を尽くす
保護者との関係を維持

レベル2: 学校関心刺激

→チャンネルとチューニング
訪問自体が刺激
生徒に合わせる

レベル3: 学校刺激

→学校に関する話題
(行事・友人・学級だより等)

レベル4: 登校刺激

(出典：藤岡孝志 (2005)「不登校臨床の心理学」を改変)

2. 家庭訪問のポイント

具体的な手立てを考える

①訪問までに何をするか？

・情報収集(てのひら)

②どんな構造にするか？

・いつ行く？…朝/昼/夕/平日/休日

こちらの都合/親・子の都合

・場所は？…玄関/部屋/外

・誰と会う？…本人と/母と/父と

・人数・期間・頻度は？

③どんな狙いにするか？

・刺激のレベル(左下参照)

④どんなことをするか？

・勉強・会話・遊び・外出



3. 不登校生徒と保護者の変化過程

不登校生徒やその保護者と関わる中で、思うように前向きな反応が得られず、教師もしんどい気持ちになることがあります。でも今、彼らに変化(成長)の過程のどこに位置しているのかが分かれば、落ち着いて対応ができるのではないのでしょうか。

I 不安定期	II 試行錯誤期	III 諦観期	IV 安定期
〈子ども〉			
○身体不調 (頭痛・腹痛・倦怠感による遅刻・欠席)	○反抗 (エネルギー不足・疲労・家庭内暴力)	○底 (昼夜逆転・再依存・閉じこもり) ○回復 (何かに興味を向ける)	○登校開始
〈保護者〉			
○混乱 ○原因追究 ○除去へ	○受け止め ○登校期待 ○子どもへの否定的見方 ○登校強制 ○執着	○諦め ○悟り ○肯定 ○これまでの子どもへの枷を取り払う	○不登校の受け入れ

相手の状態を理解する

参考：山下(1998)/末内(1999)